ユートピア論 ――『太陽の都』

井ノ川　清

0．ユートピア思想の勧め

「ユートピア思想」というと日本語に移し替えて言えば，「理想郷を巡る像およびその思想」ということになろうか。20世紀もあと数年を残す世紀末の時代となり，世紀末現象が漂っている。21世紀のイメージが不透明でいまひとつ定かでなく，人々は不安に駆られている。このような状況にあって筆者は，各分野・部門に於ける「ユートピア思想」の提示・創出を広く求めたい。

ユートピア思想としては，古代ギリシアのプラトンの『ポリテイア』，ルネサンスのユートピア文学のなかのトーマス・モアの『ユートピア』，カンパネッラの『太陽の都』などが良く識られている。その他にも各民族各国家に数多くユートピア思想は有るであろう。

しかし有史以来現在までに刊行された膨大な数の書物に較べれば，ユートピア思想を扱った書物はごくごく微少なものにすぎない。このことは人間というものが，いかにその時代の状況に埋没してしまうものであるか，また人間の意識と視野がいかに狭量なものであるかということを示している。

しかしながら今日未来のイメージ・ビジョンを取り扱ったものが全然無いかというとそうではない。いやむしろこの種のものは数多く登場している。何といっても一番多いのは経済及び経済学の領域に於けるものであろう。「ポスト資本主義」「21世紀の日本経済」「21世紀の世界経済」などと

いうテーマで書かれている書物は数多い。これらの書物の多くは計量経済学に基づいてはじき出される予測される数字やグラフを駆使して未来のビジョンを描き出している。また経済学と科学技術が結びついて21世紀の社会は「マルチメディア社会」であると喧伝されている昨今である。更に国際政治・経済の分野では，国民国家の枠を越えた地球的規模での組織の創設などが議論され出してきている。例えば国連機構の改革・充実・改変・発展について語られている。また，戦後50年続いたブレトンウッズ体制に代る新しい国際通貨制度の模索が現われ始め出している。また科学技術の分野でのユートピアは何といっても核融合エネルギーの実用化ということであろう。

ユートピア思想の原初は何といっても宗教的な思想であろう。『新約聖書』には「神の計画と予知」ということが語られているし，仏教思想においても「極楽浄土」ということが語られている。これらの思想は現実の悲惨さに対照するイメージとして広く人々に受け入れられたのであろう。これらの宗教的イメージに影響されて，これらの世俗化された形態としてのユートピア思想が発展してきたのであろう。今日でもまだ多くの大衆は宗教的ユートピアに共感し信仰している。新興宗教の隆盛がこの事実をよくもの語っている。しかしまた一方知識人たちはユートピアをより現実的なもの，具体的なものとして捉えている。例えば我が国に於ては，政治の分野では，未来の社会創出の土台となる理念・ビジョンに向う「政策」の提示が求められ出している。ユートピア思想は単なる「夢物語」ではありえなくなった。かつてはユートピア思想といえば，「空想的」という言葉で言い表わされるものが多かった。しかし，ではユートピア思想は「科学的」でありさえすればよいのか？　単に「科学的」であることだけではユートピア思想とは言えない。ユートピア思想は「夢」と「ロマン」を感じさせ人々の憧憬の的となるものでなければならない。その実現のために一生を賭けても悔いないと人々に思わせるものでなければならない。自らの人生

観・世界観に基づいた目標となるものでなければならない。

1. マルクス主義とユートピア

1917年にロシア革命が勃発した時，それは全世界に衝撃を与え人類に指し向けられた光明かと思われた。その後世界中に社会主義思想が広まり，歴史的に次々と社会主義国が誕生し，遂には世界中が社会主義国に成る日も近いと思われるに至った。しかし1989年のベルリンの壁崩壊に象徴される社会主義国の行き詰まり状態の中で社会主義主義思想は色あせ，旧社会主義国は一斉に打ちそろって資本主義国を目指す方向転換を行った。しかし長年の社会主義体制の状況の中で培かわれてきた人々の意識と社会経済体制は一挙に資本主義化されるには無理が有った。それらの国々は社会主義システムを続けていくにも困難にぶつかったが，資本主義化するのにも失敗している。人々は混乱し，やはりコミュニズム体制の方が良かったのではないかと思い直している人々も増えてきている。反動としての保守派の盛り返しの動きも目立ち始めてきている。しかしこれらの動きも明るい未来に見通しを持った動きではない。混迷の一語につきる現象である。一体何故このような状態になってしまったのであろうか。

この原因のひとつにマルクス主義からユートピア思想が歴史的に次第に欠落してしまったということが挙げられよう。マルクス思想の出発点は，当時の初期資本主義社会の矛盾と悲惨さに対する反対思想であるユートピア社会としての共産主義社会の建設という所に有った。初期マルクスの思想にはユートピア思想が色こく滲み出ていた。しかしマルクスはこのユートピア社会建設のための武器を求めた。つまり革命理論の創出を求めた。この理論追求という過程の中でマルクスは，ロバート・オーエン，サン・シモン，フーリエ等々の思想を「空想的社会主義」と呼び「科学的社会主義」なるものを追い求めた。マルクスの気持としては，人道主義などで現

実のプロレタリアの悲惨さを救うことなど出来る筈はないというものであったろう。革命とはプチブルのおしゃべりではない。それはひとつの階級がひとつの他の階級をせん滅することだという考えになった。「革命」とは本来現存の矛盾を含んだ社会体制を根本的に変えることであった。それは新しい社会へ向けて現実を変革することであった。しかしマルクスは「革命」イコール「権力奪取」と捉えるようになった。そうなれば「権力奪取」のための最短距離は「暴力革命」ということになる。1848年の『共産党宣言』には「強力的に」現存の社会体制をひっくり返すということが高らかに宣言されている。それ以後真のコミュニストであるか否かは「暴力革命」を認めるか否かということになった。プロレタリアートが「権力奪取」に成功しさえすれば，一挙に矛盾なき理想社会が到来するものと思われるようになり，「暴力革命」が至上の究極的目標であるかのように思われるに至った。一切の革命理論はいかにして権力を奪取するかという目的を実現するための手段になった。

マルクス思想の成立過程を振り返って見ればそれは二面性を持つ。「マルクス経済学」の成立過程という観点から見ればマルクス思想は一貫して進歩発展したものであるといえる。それは初期マルクスの哲学的批判的意識から次第に現存の資本主義社会の構造の原理的解明を追求するものとなり，ヘーゲル左派の哲学的観念性から，経済学的理論の創出というプロセスを経て遂にその成果である『資本論』の誕生となったのである。マルクス以後のマルキストたちの多くはこのプロセスを是として，このプロセスの研究解釈に没頭した。この解釈から踏み出るものは異端として厳しく排除された。

しかしマルクス思想の成立過程を見る他の観点が有る。それは哲学的観点とでも言うべきものである。この観点から見るとマルクス思想は哲学的には堕落していく過程であったと言える。ヘーゲル左派からフォィエルバッハへの哲学はヘーゲルの観念論哲学を批判していく過程の中で次第に

「人間」の姿を明確にして現実的感性的具体的人間像を浮き彫りにするものであった。しかしマルクスはこれに満足せず，これを批判し，人間の経済的存在としての側面，物質的存在としての側面を追求して遂には人間存在の多様な存在論的側面を打ち消し，人間を単に経済的物質的存在としてのみ把握するに至った。これは人間解明の閉鎖性化，狭隘化に他ならなかった。人間は確かに理念的存在崇高的存在という側面からだけ見られるべきものではない。偉そうな事を言う人間も飯を喰い眠らなければ生きてはいけない。またチンパンジーと同じ側面や性質も持っているだろう。だからといって人間を単に経済的物質的動物的存在としての側面からだけ見るのも片寄った見方である。人間は，ブッダ，ソクラテス，孔子，キリストといった人たちが到達した崇高な側面も持っているのである。即ち人間の尊厳を示す存在も存在していたのである。そしてかつて哲学者たちはこのような人間の尊厳性の証としての存在を追求し続けてきたのである。マルクスはこの哲学の流れを断絶した。マルクスは人間を卑小化した。かつて哲学者であったもののうちだれがマルクスのように公然と暴力を唱導したであろうか？　かつて哲学者たちは人類を野獣的人類から人間的人類へと引き上げることに全力を尽した。しかしマルクスはこの流れを嘲笑した。哲学者マルクスとしてはマルクスは堕落した哲学者であったといえよう。

マルクスは資本主義社会体制の批判に一生を捧げた。しかしマルクスはその膨大な著書の中で来るべき未来のユートピア社会である筈の共産主義社会のイメージを殆んど語っていない。マルクスはマルクスの生きた当時の資本主義システムの構造的原理論解明と批判に全力を傾けた。そしてその成果の中には今日でも尚妥当する幾つかの肯定的理論も有る。しかしマルクスがユートピア社会についてほんの断片，例えば『ドイツイデオロギー』の中に有る有名なもの，『私はまったく気のむくままに今日はこれをし，明日はあれをし，朝には狩をし，午後には魚をとり，夕には家畜を飼

い，食後には批判をする……」といったものや，幾つかのスローガンといったものしか述べなかった故にマルクスの後継者たちは，ユートピア思想について考えることなど忘れ去って権力奪取のことだけを考えた。従っていざ権力を奪取してみるとどのように未来のユートピア社会を建設していったら良いのか途方にくれた。レーニンも戦時共産主義政策をとって失敗し，ネップ政策を打ち出してみたものの早死にし，その後はスターリニズム体制の出現となったことは良く知られている。毛沢東も日本軍国主義との戦いでは輝かしい成果を挙げたものの，その後の国内建設では，「人民公社」政策や「文化大革命」政策をとって失敗している。

マルクス主義によれば，社会の変化にも「法則」が有り，資本主義社会は社会主義社会を経て必然的に共産主義社会に至るという。このような「法則」が有る以上個人がじたばたしたところでどういうことはない。紆余曲折が有るにせよ，資本主義社会には破滅的大恐慌が起って革命になり，必然的に共産主義社会が生まれるといった理論をマルキストたちは信じている。このような「法則」が有る以上，人間は「法則」の前に客体化され，「法則」進展の過程の媒体でしかなくなる。しかし実際は恐慌が起きても，その状況の中で革命を起こそうとする主体的存在が居無ければ革命など起きるものではない。

またマルクス主義によれば，社会の変化は「生産力」と「生産関係」の弁証法的関係に基づくという。「生産力」が増大すれば，これと桎梏する「生産関係」は爆破され新しい「生産関係」が生まれるという。従ってマルキストたちは「生産力」中心主義をとる。権力を奪取したものたちが先ずやったことは「生産力」の増大ということであった。社会主義国では特別優れた生産性をあげたものが「労働英雄」として賛美され宣伝された。しかしあれ程「生産力」中心主義をとった社会主義国で，実際は資本主義国よりはるかに劣った生産性しか達成できなかったことが暴露された。なぜ生産力が上らなかったのか？　中央集権的官僚的指令型経済システムの

構成をなす「生産関係」の故である。

「マルクス主義とユートピア思想」についてはこの辺でやめておこう。「マルクス主義の諸問題」というテーマで尚論ずる機会も有るであろう。マルクス主義が現在の厳しい状況の中で生き延びようと本気で考えようとしているのであれば，マルクス主義は未来のユートピア社会である筈の「共産主義社会」について，ユートピア社会創造といった面から考察し，その具体的現実的にしてかつ理想的なイメージを打ち出していくのでなければならないであろう。この為にはマルクス思想への信仰的態度でなく，これの批判的考察が，その予備的前提的作業になるであろう。正統か異端かという宗教的信仰的態度からは未来あるユートピア思想は決して生まれてはこない。

2．宗教的思想家にしてかつ革命家でもあったイタリア人カンパネッラについて

ユートピア思想の書，『太陽の都』の著者カンパネッラについての知識は筆者には皆無であった。最近この書を近藤恒一訳（岩波文庫）で読んだ。そして近藤恒一氏の「解説」を読み，カンパネッラの生涯の大略を知るに及んで，大きな衝撃を受けまた驚嘆の念を感じた。もし筆者がもう30年若ければイタリア語を勉強してカンパネッラについて研究するであろう。それほどにカンパネッラは魅力的人物なのである。以下に，『太陽の都』を論ずる前に，カンパネッラの人間像について若干，近藤恒一氏の解説文に則して書き出してみよう。

カンパネッラの生涯を一口にして言うとこうだ。25才から60才までの殆んどを獄窓にすごし，監禁や幽閉の生活は32年余りに及んだ。そして66才の老令で祖国イタリアを逃がれ，亡命の地パリで71年の波乱の生涯をとじる。もう少し詳しくみていこう。カンパネッラは1568年9月5日に

イタリアの山村スティーロで生まれた。かれは抜群の知能と記憶力をそなえ，神童の誉れが高かった。13才の時聖職者を志願して僧服をまとう。14才から21才までのあいだ，修道院を転々としながら研究に打ちこむ。あらゆる種類の書物をむさぼり読む。92年5月，ドミニコ会内部で告発され，裁判にかけられる。93年1月，24才のカンパネッラはパドヴァ大学に入学する。ガリレオとも相識り，生涯変らぬ友情にむすばれる。94年のはじめ，宗教裁判所の命令によって逮捕され，自筆稿をすべて没収され，拷問にかけられる。そして同年10月宗教裁判所のローマの獄につながれる。98年8月，30才のカンパネッラは生地スティーロに着き，まもなく新しい政治運動に巻きこまれる。この運動はカラブリアの現状を変革して，共産主義的な共和国を樹立することをめざしていた。計画によれば内部蜂起とトルコ軍の上陸によりスペイン勢力を駆逐し，新しいキリスト教国家を樹立して，私有財産制や位階制を廃し，隣人愛にもとずく万人平等の民主政治を実現する筈であった。新しい共和国の元首にして立法者と目されていたのは，ほかならぬカンパネッラその人であった。しかし8月ふたりの密告者が出て計画は瓦解し，変装して身を隠していたカンパネッラも捕えられる。1600年1月カンパネッラにたいする最初の尋問が行われるが，かれは嫌疑をすべて否認する。しかし残酷な拷問にかけられて自白する。当時の法律では，死刑をのがれうる道はただひとつしか残されていなかった。発狂である。こうして彼は，狂人をよそおうことを決意し，計画を実行にうつす。狂気の真偽を最終的に確認するため，残酷な「徹夜の刑」が執行された。綱で宙吊りにする拷問が40時間ぶっつづけで行われ，睡眠をとることも許されない。両肩の関節は脱臼し，三度の短い中断のときも，刃物のついた椅子の上におろされる。だが強靱な意志の力によって狂人をよそおいとおしたことで，かれはついに死刑をまぬがれ，終身刑を宣告される。

晩年（66才）はパリに亡命し，大歓迎をうけ，宰相リシュリューに招かれて面会し，国王ルイ13世に謁見をゆるされ，年金を与えられる。1639年

5月21日ドミニコ会修道院の自室で終油式をうけ，同僚たちの祈りのうちに息をひきとる。晩年は幸せであった。

次にカンパネッラの著作活動についてやはり近藤恒一氏の「解説」に則して一見しておこう。カンパネッラの関心と研究は多方面にわたり，その著述は膨大な量にのぼる。彼の関心の広さ多様さは，彼の生きた時代そのものの要求するところでもあった。ルネサンス期をつうじて，ヨーロッパ人の知的地平は飛躍的に拡大し，旧来の諸学も知識体系も，いまや時代遅れとなっていた。このような新しい事態に直面して，カンパネッラは旧来の知を，あらゆる分野において革新しようとする。しかもこの「革新」は，個々の学問分野の革新にとどまらず，新しい包括的な知の体系，新しい「百科全書」をつくりあげようとするものであった。彼の多様な知的な探究はすべて，究極的にはこの百科全書的要求にうながされ，導かれていたといえる。当時西ヨーロッパのキリスト教世界は，さまざまな宗教の並存する宗教的複数主義の世界に直面していた。カンパネッラの問題意識は，異教や異端を理論的に克服しうるような，普遍的な真の宗教，真の神学をつくりあげること，にあった。こうしていまや，新しい普遍的なキリスト教神学の樹立がもとめられ，この普遍的神学を基底とする新しい百科全書の形成がもとめられた。ここにカンパネッラの生涯をつらぬく巨人的努力があった。彼の政治思想は，唯一の普遍的宗教のもとにおける万人の和合という理想の立場から書かれている。

3．『太陽の都』の批判的考察——官僚主義の芽生えと極端な全体主義的合理主義的思考

『太陽の都』が極度の理想主義に貫かれていて，その万人平等の思想やその他幾つもの示唆を与える透徹した清澄なエトスとパトスに基づいて書かれた力作であることは言うまでもない。しかし筆者はこの『太陽の都』

の考察にあたって，これを賛美する立場には立たない。特に我々は歴史的に旧社会主義国の失敗を経験しているので，『太陽の都』の疑問点，欠陥がよく見えるのである。従って『太陽の都』を論ずるにあたっても，それの批判的考察という観点をとらざるを得ない。

先ず『太陽の都』の統治形態を一瞥してみよう。

「住民のあいだにひとりの統治者がいます。聖職者で「太陽」と呼ばれています。私たちのことばでいえば「形而上学者」にあたります。この人が，精神面でも世俗面でも全住民の指導者で，あらゆる政務が最終的にはかれによって決定されます。かれには補佐役として三人の副統治者がいます。「ポン」「シン」「モル」で「力」「知恵」「愛」という意味です。」(17 頁)

以上のように『太陽の都』は「哲人政治」「賢人政治」の統治形態をとっている。

「統治者「形而上学者」はかれら三人の副統治者とともに，こうしたあらゆる仕事をつかさどります。「形而上学者」抜きでは何ごともなされないからです。あらゆることをこの四人で相談し，「形而上学者」の意向に一同が賛成します。」(22 頁)

この統治形態は一種の「プロレタリア独裁論」に通ずる。さて決定は「形而上学者」が行うにしても，実際の行政を行う手足となる人間がいる。これが「役人」である。『太陽の都』ではこの「役人」が非常に美化され特権化されているのである。

「私たちが持っている美徳の数と同じだけの役人がいるのです。――「寛大」と呼ばれる役人がひとりいます。それから「高邁(こうまい)」，「貞潔」，「剛

毅」，刑法・民法上の「公正」，「勤勉」，「真理」，「慈善」，「感謝」，「慈愛」などという役人もいます。これらの役人に選ばれるのは，子どものころから学校で，これらの美徳のどれかにとくに向いていると認められる者です。」(26 頁)

このように「役人」は，人類史上「倫理」というものが登場して以来，人々の目標とされてきた美徳の体現者なのである。

「かれらのあいだには，……私たちのあいだでよく告発されているような罪悪は，なにひとつ見られません。」(26 頁)

「役人」のこの美化と特権化は，プロレタリア独裁論をとった国々の官僚に与えられた美化と特権化に極めて通じているものがある。

さて『太陽の都』では私有財産制は否定されている。

「およそ所有権というものは，自分だけの家をつくり，自分の妻や子どもを持つことから生じ，そこから利己心が生まれるのです。……しかし利己心がなくなれば，公共への愛だけが残るのです。」(24 頁)

この考えは余りに人間「性善説」に傾いているであろう。

『太陽の都』では婦人共有制が実行されている。しかし婦人共有制という制度は男性中心主義社会から考えられた制度である。「女性」は「男性」の所有物であり，私有財産であるという考えがあるからこそ「共有制」という考えがでてくる。女性が男性の「共有物」になっても女性が男性の「物」であり続けるという実態は変らない。この考えには女性の人格，独立した，男性と対等な人格というものが欠落している。

ところで所有の平等，私有財産制の否定はどのようにして守られるのか。ここで「役人」に監視の職能と権限が与えられる。

「しかもだれひとり不相応に所有することのないよう役人たちがよく目を光らせていますから，たがいに物品の授受をすることは，いっさいできません。」(25頁)

そして万人平等の社会を運営していく支えとなる「役人」が次のように特権的地位を与えられている。

「役人たちは一番上等の料理を受けとりますが，午前中の授業や学問上の討論や武芸でとくに成績のよかった者の食卓に，しばしば自分の分け前の一部を贈ってやります。」(35頁)

この特権的役人の存在は，かつてのソ連邦における特権階級，ノーメンクラトウラの存在を彷彿させる。

次に人間にとって最も重要な行為のひとつである「性生活」について『太陽の都』の人たちはどのような状態であろうか？

「女はだれでも，19才になるまでは男に身をまかせません。そして男は21才まで，また虚弱体質だともっとあとまで子づくりの営みをおこないません。……そしてからだの大きな精力的な男は，大きな美しい女としか交わりませんし，太った女は痩せた男と，痩せた女は太った男と交わらせ，釣り合いを図ります。」(38頁，39頁)

この言は動物の交配を思わせる全体主義的発想に基づくものである。性

行為は「種」のためという基本原則が有るからである。更に性行為そのものにまで監視の目が光っている。

「夕方，若者たちは，男教師と女教師の指図にしたがって，寝床をととのえにゆき，それから眠りにゆきます。……そして男女別々に，二つの部屋で眠ります。性交すべき時刻になると，女教師がやってきて，それぞれの部屋の入口をあけます。

その時刻は「占星学者」と「医学者」によって決められます。

子づくりの営みをする男たちは，これに先だつ三日間は性交や悪いおこないをつつしんで清浄をたもち，造物主に敬虔でないと，罪を犯すものとみなされます。……空想的で気まぐれな男たちは，太っていて温厚な，おおらかな女たちと交わらせます。」(39 頁～ 41 頁)

さらにまた女性の人格を全く無視した次のような陳述もある。

「この女たちのなかに，ひとりの男と交わって妊娠しない者がいると，ほかの男たちと交わらせます。そして不妊の身であることがわかると共有の女となることができます。」(42 頁)

このようにあまりに息苦しく，個人の人格や自由を否定する体制を『太陽の都』の人たちがとるのは，次のような原理原則があるからである。

「子づくりの営みにしても，私的な善ではなく公共の善を目的とする宗教的行為としてきびしく規制され，しかも役人たちの指図に従わねばならないのです。……かれらは……聖トマスのいうように，生殖の目的は個体の維持ではなく種族の維持だというのです。だから生殖は，国家公共のことがらに属し公務であって，個人の私事ではないことになります。……そ

れで役人たちは，その哲学にもとづいて，すぐれた素質にめぐまれた子づくり役の男女を組みあわせるのです。……ふたりの組みあわせが子づくりには有害であるときは，けっして性交は許されません。」(44 頁～ 47 頁)

役人にここまで指導される余りに合理主義的思考に基づいた社会は今日では決して受け入れられないであろう。しかし『太陽の都』の人たちにすれば，ユートピアを構成するにふさわしい住人となるには，自由奔放ではなく統制的なシステムによるのでなければならないと考えるのであろう。

カンパネッラ自身『太陽の都』をユートピアとして描写し，主張したかったのは明らかだが，上に引用した記述のあとに，「かれらもいつかは，この習慣を捨てるかもしれません。」(50 頁) と述べ，「キリスト教の奇蹟(きせき)によって実証された生きた教えを知るならば，……この教え（＝キリスト教の教え，筆者注）に同意することでしょう。」(50 頁) と述べて，一応キリスト教からはずれた見解を持っているわけではないという自己弁護もしている。しかしこの言はキリスト教側からの弾圧を恐れてつけ加えた言であると見なされるかもしれないのである。異端であるとして断罪されるのを恐れての妥協的追加文章であると考えられるのであって，カンパネッラの本心は『太陽の都』の有様の陳述が最も自己主張したいものであったと思われる。

以上見てきた如く，歴史的にナチズムとスターリニズムという二つの人類史上の悲劇を経験してきた我々にとって，『太陽の都』はもはや我々のユートピアたり得ないと言えよう。官僚主義と全体主義的合理主義的思考は歴史的に断罪されたからである。

4．変革の時代から創造の世紀へ

カント，フィヒテ，シェリング，ヘーゲルといったドイツの近代哲学の

観念論哲学者たちは，壮大な観念の王国，精神の王国を築き上げた。ヘーゲルが『精神の現象学』を著述し終えた時には，ヘーゲルの胸中には，自分こそが，理性，意識，精神，知の総括的体系化を果したのだという感慨が満ちあふれていたことであろう。現実のドイツは封建主義と後進性が支配していたにも拘らず，ドイツの精神は高く飛翔し，その偉容を誇った。

しかし，イギリスで始まった資本主義は次第にドイツにも及んで，新たにプロレタリアの問題が発生しつつあった。プロレタリアの悲惨さは，『資本論』にも述べられているように，幼児ですら労働を強いられたほどにひどかった。この現実が若きマルクスをして，華麗なドイツ観念論哲学の批判へと向わせた。

マルクス言った。「哲学者たちは世界をいろいろに解釈してきたにすぎない。たいせつなのは，それを変更することである。」マルクスは「知」の次元での主体性を「実践」の次元の主体性に変えた。世界に矛盾が有るならば，それは人間の手によって変革しなければならないし，かつまた変革しうるのだというのがマルクスの主張であった。このようにマルクスが人間を「変革の主体」として捉えたことによって，歴史は近代史から現代史へと大きく跳躍した。ここに現代史のページは始まった。人間は資本主義を変革しようとする側と資本主義を防衛しようとする側とに分れて凄惨な戦いを展開した。まさに19世紀と20世紀は変革の時代であった。変革を求めたのは共産主義の陣営だけではなかった。資本主義擁護の陣営も資本主義システムを維持するために相ついで変革を行った。ヒトラーのアウトバーン建設事業も，ルーズベルトのニューディール政策も，社会保障政策も，ケインズ理論も，皆資本主義維持のために必要な変革の行為であった。変革とは，世界，社会システム，一般に人間をとり巻く状況に矛盾を発見し，それを批判し，変更することである。

今，20世紀をあと数年にして終えようとしている現在，世界は尚多くの矛盾をかかえている。南北問題，民族問題，人種問題，失業問題，地球環

境問題，核の問題，エネルギー問題，等々難問が目色押しである。今尚「変革」は多くの分野で必要である。しかし19世紀と20世紀の変革の時代を通じて明らかになったことは，単に矛盾を指摘して，批判し変更しようとするだけでは十分ではないということである。一体何に向けて変革するのか？　どのようなビジョンに向けて現状を変革するのか？　ここに21世紀は創造の世紀でなければならないという命題が登場してくる。創造とは全く新しい価値を造り出すということである。各分野各領域で新しいユートピアを提起することである。

例えば，経済の分野における「失業問題」ひとつを例にとってみよう。失業問題は景気が良くなれば解決されると考えられている。ではどうしたら失業問題を解決するに足る程の好景気は到来するのか？　単に在庫調整の進展，買い替え時機の到来，設備投資の拡大，個人消費の上向き，等々といった循環論的発想だけでは，現在のヨーロッパの深刻な雇用問題を一掃することはできない。そのためには，全く新しい価値の創造，即ちかつての自動車産業の勃興のような全く新しい製品の開発に基づく新しい文明の創造が必要である。そのためには科学技術分野におけるユートピア思想の協力が不可欠である。21世紀は発明発見の世紀でもあるだろう。

いまや世界は暗い。人々は現状に巻きこまれて明日を見い出せないでいる。日々の出来事に一喜一憂している。このような状況だからこそユートピア思想は必要である。国民国家の利己的自己主張だけでは人類は救えない。「人類」という概念の内容にふさわしい実体を持った「人類」を創造することが21世紀の人類にとっての最重要課題になるであろう。

〔注〕 本論を書くにあたって使用したテキストは，カンパネッラ著『太陽の都』近藤恒一訳，岩波文庫，1992，である。なお，（2.）のカンパネッラの生涯と著作活動については，近藤恒一氏の「解説」文に全面的に依拠した。